

子供と環境(一)

山下 俊 郎

一 環境はさうして重要視される様になつたか

いまこゝに眼の前に二人の子供が居る。この二人は、全く同じ事を言はれたとしても、言はれた事に對して全く同じ事を答へ、同じ動作をするものではない。この二人はそれ／＼違つた答へをし、違つた動作をするであらう。この違ふ事を言ひ、違ふ事をするのはさうしてか言ふに、それは二人の子供がそれ／＼に違ふ個性を持つてゐるからである。子供を全體として眺めたとき、何處か知らそれ／＼に違ふ所がある、これをわたくし達は個性と言ふのである。個性といふものは子供の生活の色々の場面にそれ／＼現はれて来る。子供が澤山集まれば集まる程個性の違ひといふものは、それだけはつきり現はれる。何か言ふにすぐ泣き出す泣き蟲の子供もあらう、すぐに喧嘩を始めてしまふ喧嘩早い子供もあらう。いつまでもぐ／＼してゐる子供もあり、ちつともじつとしてゐないで、飛びまわる子供もある。みなそれ／＼の個性といふものなのである。一人々々の子供を見てもこれだけの違ひがあるが、例へば山の手の子供と下町の子供を比べて見るに山の手の子供は山の手の子供としての特徴を持つて居り、下町の子供は下町の子供としての特徴を持つてゐる。また都會の子供は都會の子供なりに、田舎の子供は田舎の子供なりに、それ／＼の特徴といふものを持つてゐる。こゝういふ風に子供をそれ／＼一つの集團として眺めて見るに、またそれ／＼に集團的個性とも言ふべきものが現はれて来る。

こう考へて来るこ子供は一人々々を眺めて見ても、また集團的に眺めて見てもそれ／＼に個性こいふものが認められる。こころでこいふ子供の個性こ言ふものはさういふ條件によつて定つて来るかこ言ふこ、そこにわたくし達は子供の環境こいふものを考へなければならぬのである。

子供の個性こいふものを考へて行く上に、その環境が非常に大事であるこいふ事は、いまこゝに新しくりたてゝ言ふまでもなく、昔から随分古く言ひならはされてゐる事である。こいふ環境を重く見る見方は西洋では既に遠くギリシャの昔にまで遡り得るこ言はれるし、またわざ／＼西洋の例まで持ち出さなくとも、東洋には既に孟子の母が子供の孟子にわるい影響を與へるこ言ふので三度も居を移したこいふ有名な「孟母三遷」の訓へこいふものがある。俗にも「氏より育ち」こ言ふ事がある。こいふ事は子供にこつて環境こいふものが極めて大事であるこいふ事をおのづから物語つてゐる事は言ふまでもない。

それではさうしてわたくし達がこゝに環境こいふものを事新しく持ち出すかこ言ふこ、先づ教育こいふものが、個性の認識の上に根ざすやうになつたからである。個性の認識こいふ事は、環境の持つ意味こいふものを新しく認識し直させるのである。前に述べた様に環境の意味こいふ事に就いては以前から唱へられては居る。然しこいふ場合の環境は環境だけを考へる環境萬能論である。環境さへ考へれば何も考へるに當らないこいふ極端な考へ方である。然し、今日ではこの様な考へ方は非科學的な考へ方である。さうしてかこ言ふこ個性こいふものは今日の科學によれば唯環境だけで以てきまるものではないからである。個性こいふものを定めて来る條件は、環境だけではない。それは素質にもまたよるものであり、素質をきめるものは遺傳である。わたくし達は環境萬能論を説くわけにはいかないのである。こころが一方遺傳の研究こいふ事は今日までに相當に深く廣く行はれてゐる。これに對して環境の研究こいふ事は近年になつて漸く興つて來た。新

しい科學的立場といふものに立つて、一方に遺傳といふ事を考へ乍ら、もう一つの要素として環境といふ事を考へなければならぬ。この様にして新しい科學的立場だ、昔は環境萬能論であつたものが、今度は一度遺傳といふ事を考へに入れて、謂はゞ分を知つた環境論といふものが樹てられなければならない。極く大まかに形式的に考へても、この様に子供の個性といふものを考へて來るに、新しく環境の問題といふ事が考へ直されなければならないのである。これに更に近世の教育の上にさういふわけで環境といふものが大事に考へられる様になつたかを考へて見るに、教育の變遷の歴史といふものがさうしても環境といふ事を考へさせないでは置かない状態になつて來たのである。この事を少しく詳しく考へて見やう。

近代教育の上に環境が非常に重く見られる様になつたといふ事情には、二通の事情が考へられる。その第一の事情といふのは社會的な事情でも言ふべきものである。それは近代以前の社會組織と教育組織といふものと、近代のこの二つのものを比較し、その間の變遷といふものを辿つて見るとおのづから肯ける事である。先づ社會組織といふ點から考へて見るならば、近世初期になつて以前は打つて變つた大きな變化が起つて來てゐる。即ち近世になつて産業が勃興し、殊に商工業が盛になつて來るに、さういつた産業上の營みを中心として人口が或る一ヶ所にかたまつて來るといふ現象が起つて來る。このやうにして方々に出來たものが近世になつて起つて來た都市である。この様に都市に人口が集中して來るに、現代の都會人には既に常識になつてゐる様にそこには誠に種々雑多な階級が一緒に混然と住む事になる。一方には富裕な上層階級があると同時に、また一方にはその日の暮しにも困る様な貧困階級がある。而もこういう様な貧困階級は勞働者として、一方から考へるに缺く事の出來ない存在であり、都市といふものが發生する以上必然的に生れて來なければ

ならないものなのである。こゝにいふ下層階級の存在は既にそれ自身だけでも一つの社會問題であるが、これは同時にそれ／＼の階級の子弟の問題である。こゝに教育上の問題が絡まつて来る。

近世以前の教育は社會の上層階級の所有物であつた。歐米でもさうであつたが、我が國に於てもまた、教育されてゐたのは上層階級の子弟だけであり、所謂庶民教育なるものが起つて來たのは極く新しい徳川時代になつてからである。そしてそれでもなほ教育はまだ／＼一種の有閑者のみの受け得る特權であり、また學ぶ意志のあるものゝみが、そしてまた學ぶ能力のあるものゝみが受け得る特權であつた。結局近世以前の教育は、一定の資産あり、一定の能力あり、一定の意志あるものゝみが受け得る特權であつたのは洋の東西を問はず同じである。そして教育がこの様に一部のものゝみが受け得る特權として認められてゐる限りは、教育の仕事は極めて簡單である。ちやんま定つた一定の形式を子供にあてがふ事で足りるのであり、この型にあてはまらない子供はその型の枠の外に投り出せばそれでいゝからである。

こゝろが近代の教育はさうは行かない。かういふ枠の外に出る子供の上にもまでも手を伸ばさなければならなくなつて來てゐる。その根本には凡そ子供いふものゝ觀方が變つて來たといふ事情も横たはつてゐやうし、また社會問題から起つて來た所の一般庶民階級の子供も亦教育さるべきであるといふ様な考へ方も底を流れてゐるであらう、が一番の直接の動因として働いてゐるものは形式的な要素ではあるが、義務教育制の施行といふ事である。近代の文明諸國が義務教育制を敷いたといふのはまださう古い事ではない。然し一旦義務教育制が敷かれたまなるま少なくも良心ある教育者は従前通りの定つた形式の枠を振り廻す事ではさうしても事足りなくなる。言ふ迄もなく従前の教育は前にも述べた様な選ばれたもの達のみの受け得る特權であつたから、定つた型式を押しつける事で事足りた。然し義務教育制になるま、そこには、種々雑多な階級の子供を同じ様に取り扱はなければならない。殊に都會に於ては上層階級もあり、中流階級もあり、下層

階級もある。それ／＼の階級から出てゐる子供達はみなそれ／＼に異つた特徴を持つてゐる。そこに教育者の頭に問題として起つて来るのはそれ／＼の階級の子供達の特徴とその教育方法といふものでなければならぬ。そこで最も問題になるのは都會の子供達の特徴、貧困階級の子供達の特徴をつかむ事である。そしてそれ／＼の子供達の特徴をつかむ上にはさうしてもその子供達の育つて來、そして生活してゐる環境といふものが理解され、そこから先づ教育が出發するといふ事にならなければいけないのである。近代の教育の上に環境が重く見られる様になつた根柢には先づこの様な事情が横たはつてゐるのである。

これを要するに環境が重要視される様になつて來たといふ事情は、近代社會組織の複雑化と教育が一般大衆の上にくりひろげられる様になつたといふ事から必然的に起つて來たものなのである。これは強ち義務教育といふ事を考へなくても自然に教育の對象はひろがつて來つゝあるから當然の事であると言へる。幼児の保育に於ても、保育所の起りには社會的意義の重く見られる系統のものさうでない教育的な立場からのものさうの二つの流れがあるやうであるが、少なくとも我が國に於ては幼児保育所は幼稚園が最初の流れであり、のちになつて託兒所の系統のものが起つて來てゐる言つていいであらう。ところで託兒所で行はれてゐる保育の方法は先づ大體幼稚園流の型がそのまゝ移されてゐるやうである。託兒所に來てゐる子供達は下層階級の子供達であり、幼稚園流の型式を持つて來て果してしつくり行くかさうかは問題である。事實託兒所で保育の任に當つてゐる保育者諸姉はこの點に大きな問題を持ち、幼児の環境といふ事について非常な關心を持つて來つゝある様に思はれる。これは、右に私さうも考へた様な、大きな教育の流れの中で重い意義を得て來た環境の問題が、いま新しく幼児保育の分野でも問題になつて來つゝある事を示すもので、誠に當然の成り行きであると思ふのである。

そして一三度びこの様に子供の環境といふ事に眼を向けて來るさ、營に上層、下層兩階級の子供だけに限らず、田舎の

子供もある。また同じ都會なり田舎なりの子供でも色々な家庭から教育者の眼の前に現はれてくる子供達はそれ／＼にみなそれ／＼の特徴を持つてゐる。こういう風に眼をひろげて行く事によつて、子供の環境といふ問題は教育の上に益々その重大さを認められる様になつて來るのである。

さて教育の上に子供の環境が重く見られる様になつた第二の事情は異常児の問題である。そしてこの異常児の問題は教育の島から起つて來たさいふよりも醫學の側から起つて居り、殊に精神病學者の提出した問題であつた。一口に異常児と言つてもそこに色々な子供が含まれてゐるのであるが、こゝに言ふ異常児は主に所謂「問題の子供」の事である。問題の子供ではその異常性は素質から來る事も多い。然し中には環境から來るものも決して少なくない。そしてさういふ異常児を教育して行く上にさう取扱はねばならぬかさいふ事は、よくいはれる言葉を使ふならば環境の統整といふ事に根ざすものであり、全く環境の問題であると言つていゝ。一人子の問題の如きは、教育的な識見を持つた醫者によつて、ドイツで始めて環境の問題として取り上げられたものであり、最も代表的な問題の子供の場合であり、環境の問題が取り扱はれた典型的なものである。不良少年は子供の「問題」さいふ點から見ると最も大きな「問題」である。この不良少年の問題はドイツでも研究されたが、アメリカでもまた大きな社會問題として環境の問題に迄發展して來てゐる。アメリカでは兒童の精神衛生運動が非常に盛であり、その爲に全米各地に兒童臨牀指導所、(我々の言ふ教育相談所である)が設けられる様になつてゐる。この運動の起る所は不良少年の問題である。それは不良少年の問題は眼の前に不良少年になつて現はれてからさわいだのでは既におそい。不良少年を色々な方面から研究して見るに、その不良性のよつて起る所はその少年のもつて年少のまきに在り、そこには、その子供の環境さいふものが非常に大事な役割をつとめてゐる。そこで幼少な子供

のうちにその子供の環境を整へてやり、正しい導き方をしてやる事がきりもなほさず、アメリカが大きな社會問題として手を焼いてゐる不良少年の豫防といふ事に役に立つのである。そこでアメリカではまた環境の研究といふ事が非常に盛である。そしてこの問題を先づ注目させてくれたのは所謂社會精神病學者の人達であつた。

この様にして異常兒の問題は、子供に於ける環境の重要な事をわたくし達に教へてくれた第二の事情なのである。

教育の上に子供の環境を考へるさいふ事が一つの大きな課題として展開されて來た事情の歴史的な道程を、わたくしたちは右の様なきところに見る事が出来るのであるが、この事はひつくるめて言ふならば一方では教育といふ仕事の範圍が段々擴げられ、廣まつて來てゐる事であり、またもう一方ではそれと同時に教育の仕事がたゞ一つの定り切つた型だけでなく色々の場合に應じ、色々の子供に應じて細かに精密になつて來てゐるさいふ事になるだらうと思はれる。そしてそのもう一つ底を流れてゐるものを探るならば、わたくし達は近代の教育が昔からの大人のあてがひ扶持式なものでなくなつて、ほんまに子供に即した教育になつて來た事がその流れであり、この流れは子供の觀方さいふものが變つて來たその變遷の上を流れてゐる力強い流れである事を見出すのである。

こう見て來るまゝ、わたくし達は環境が重く見られる様になつた事は結局は子供の見方さいふものゝ變遷といふ事に根ざしてゐるま言つてもいい。實際、子供を研究してゐる兒童心理學に於ても近來著しい兒童觀の變遷が現はれてゐる事は誰も知つてゐる通りである。以前の兒童觀は、一人の子供を一人だけ離して、その生活してゐる社會さいふ水の中から取り出して見て、丁度屍體を解剖する様に感覺の働きがきうなつてゐるまか、こゝにいふ物の考へ方をするまかさいふ事を形式的に取扱つてゐた。恰も一つの生物をきり出して切り離して見る見方なのであるからこゝにいふ觀方を生物學的兒童觀と呼

んでゐる。然しこの頃ではこの様な見方はしない。生物學的な兒童觀は子供の生活してゐる環境の中から子供だけをポツンと引き出して來て見る見方であるが、新しい兒童觀は子供をその生活してゐる社會の中で、その環境の中で環境と共に見やうとする。新しい兒童心理學はいつでも子供をその環境の中に於て理解しやうとするのである。こゝに子供の社會的な見方があり、所謂社會心理學的な見方が非常に大事なものとされて前景に出て來るのである。そしてこの様な見方からするに子供を考へる場合に環境が考への中に入つて來ない方が無理であつて、必然的に環境といふものが考へられなければならなくなつて來るのである。

大體右に述べた様な事情からして、教育の仕事が少なくとも生きた個性を持つた一人々々の子供を相手とする仕事である以上、子供の環境といふものが考へられなければならなくなつて來てゐるのである。現在わたくし達の生活してゐるこの日本に於いても教育者の間では子供の環境といふ事に對して著しい關心が起つて來つゝあるのを見るのである。これはさうしてもさうならなければならぬ必然性を持つてゐるものなのであるから、もしも環境といふ事を考へない教育者があるならばそれは教育的良心を持たない教育者であると言はねばなるまい。幼兒の保育に於いてもやはり同じである言つていゝであらうと思はれる。

ともあれ右の様な事情からして環境の研究といふ事が近來非常に盛になつて來てゐる。そしてその研究の進展の道程は教育的環境學といふ一つの體系にまで進まんさし、また現在進みつゝあるのである。教育的環境學は右の様に子供のの上に非常に大事な意味を持つ環境といふものを仔細に研究し、そしてその研究の結果を實際の教育的活動の上に教育の方法として役に立つ技術を提供しやうといふ意氣込みを持つて現在發展しつゝある。わたくしはこの教育的環境學といふ立場から、特に幼兒の環境といふ點に中心を置いて、そこに見出される色んな實際的問題に就いて一つ宛順次に考へを廻らし、實際の研究の結果に基いて段々述べて行き度いと思ふのである。(未完)